

街を行く

第117回 Stay Home

街に行けない(その5)

「街を行く」ならぬ「街に行けない」シリーズがもう5回目に突入してしまいました。

想定外の事態による急場しのぎの本企画がこうも続くとは、まったくもって当惑しています。そして、いつになれば本来の路線へ戻れるのか、現時点では予想が付きません。かつて東日本大震災の際、福島を訪ねた時のように、こんな時こそ街の有様をお届けするのが本来の役割ですが、いまは行動自粛を第一に我慢しております。

さて、コロナ禍で花火大会や夏祭りなど、夏を彩る催しは軒並み中止です。夏のイベントをアイデンティティに地元経済を潤してきた街にとっては大きな痛手となったでしょう。

人の情緒としても痛いです。夏イベントは、お盆の里帰りの時期、旧友や家族・親戚の再会を当て込み“これぞ故郷”の愉しさ・喜びを引き立てる演出装置でした。これまで小生、交通機関の大混雑や高速道路の大渋滞を我慢してでも一斉に休む里帰りの風習には疑問を感じていましたが、皮肉にもコロナ禍を通じて人と故郷の大切さを大いに再認識したところ です。

コロナの問題で、イベントだけでなく、人の働き方や生き方が問い直され、彼らが住む街のあり方も見直されつつあります。これまで地元若者の流出で否応なしに過疎化を進行させてきた街にとって、新しく生まれ変わるチャンスの時かもしれません。見捨てられてきた「伝統文化」復活にも期待できます。

伝統文化についてお話しますと、われわれは段々と日本独自の文化を無くし



和魂洋才で、新しい日本の夜明けをスタートする時かも知れない。

ていると感じます。他所からの輸入ばかりでは、自ら文化を発信するグローバルメジャーな存在にはなれません。小生、いつも思うのですが、日本のミュージシャンは欧米歌手と比べ上手な人を見かけない気がします。例外は演歌歌手で、彼らがジャンルの異なるジャズやポップスを歌うと味があり聞き惚れてしまうのです。伝統に裏打ちされた発信力はインパクトが大きいということですね。

反面、ビジネスはグローバルが基準。伝統や慣習をむやみに重んじると生き残れません。だから大都市はダイナミックに変革すべきでしょう。一方その他の街の観点では文化を大切に守り続けて頂きたいものです。和魂洋才といったところ です。

小生は、このコロナ騒動が福に転じると信じています。災いを機会に今まで

間違ってきた街の在り方を見直して欲しいのです。再三お話してきましたが、いい加減に金太郎飴のような街づくりはやめましょう。これからは伝統を重んじた個性的な街づくりをスタートさせてください。リモートワークやテレワークが進むことにより働き方や生き方が変わりますから、街のあり方もかなり変わってきますよ。

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。